

(8) c MVS

「嵐の後には静けさが来る。」[「今日の一言」の英文参照のこと。]

(9) d (S) VOC

「眠っている犬は寝かせておけ。(寝た子は起こすな；やぶへびは禁物)」

let は使役動詞であり，lie が目的格補語の原形不定詞である。

## 【2】

### ポイント

5 文型と関連した重要動詞などを扱う演習問題である。

### 解答・解説

(1) c

SVOC 「誰でも自分の荷物が一番重と思う。」

‘O is C’, すなわち ‘his own sack is the heaviest’ の関係を考える。

(2) b

SV 「どんな紙でも結構です。あなたのメールアドレスを書き留めただけなので。」

S will do. で「Sで結構です。」という意味になる。

(3) b

SVC 「メアリはどう？ 彼女は近頃疲れているみたいだけど。」

seem C で「Cのように思われる」という意味。通常は進行形にしないで使う動詞の1つ。

(4) c

SVO 「コーヒーを飲みながらその問題について議論しよう。」

discuss は他動詞で「～について議論する」という意味。‘discuss about the matter’ とはならないことに注意する。speak は他動詞の場合「(言語など)を話す」の意味のためここでは合わない。

Ex. He can *speak* English. また，talk と look は原則として自動詞である。

(5) d

MVS 「この洗濯機はどこか調子が悪いように思われる。」

‘There is 構文’の is が seems to be になったと考えればよい。

(6) c

SVO 「私は彼を説得してお金を貸してもらった。」

talk は一般に自動詞であり，talk about A (Aについて話す) や，talk with A (Aと話をする) などと用いられるが，他動詞として talk A into …ing (Aを説得して…させる = persuade A into …ing) や，talk A out of …ing (Aを説得して…するのをやめさせる = persuade A out of …ing) のように使用される場合もあることは重要。

(7) c

SVC 「たくさんのお客さんが来たとき，その予備の部屋が大変役に立つとわかった。」

S = C となることに気が付けばよい。

prove (to be) C = turn out (to be) C 「Cであるとわかる」

(8) c

SVOO 「あなたは彼に借りているお金を返すべきです。」

owe O<sub>1</sub> O<sub>2</sub> 「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を負っている」 the money と you の間に which が省略されていることより **b** は不可。 **a** は意味的におかしい。 **d** は borrowed from なら可能である。

(9) **c**

SVOC 「医学研究は以前よりはるかに長い人生を可能にしつつある。」

render O C で 「O を C にする (= make O C)」

(10) **d**

OSV 「私がどんなに苦しんだのか誰にもわからない。」

tell は can と共に第3文型で用いられると「わかる」という意味になる。

Ex. You *cannot* tell what will happen tomorrow. 1章【1】(8)も参照のこと。

### 【3】

#### ポイント

前置詞と副詞を区別する問題である。

一般に前置詞と呼ばれる語は副詞の意味を兼ね備えており、その区別を知らないと文型を取り違えたり、誤訳につながったりすることが多い。

例えば、get over A 「A を乗り越える」という場合の over は前置詞であるから、She got over the difficulty. は第1文型〔SV〕であり、the difficulty を代名詞に置き換えると、She got over it. となる。他方、take over A 「A の後を継ぐ」という場合の over は副詞であるため、She took over the business from him. は第3文型〔SVO〕であり、the business を代名詞に置き換えると、She took it over from him. と語順が変わる。

#### 解答

**a, b, d**

#### 解説

**a** 「私たちはその申し出を断った。」

down は副詞であるため文の要素とならず、the offer は目的語となる。the offer を it で置き換えると、We turned it down. となる。

**b** 「彼はその電気をつけた。」

on は副詞であるため文の要素とならず、the light は目的語となる。the light を it で置き換えると、He turned it on. となる。

**c** 「彼女は友人たちに助けを求めた。」

turn to A for B 「B を求めて A に頼る」この to は前置詞であり、her friends を代名詞にしても She turned to them for help となる。

**d** 「彼女は黒の長いコートを着た。」

on は副詞。cf. She put it on. (彼女はそれを着た。)

**e** 「スティーブンはその丘を上がった。」

go は自動詞であることから自明と思われるが、up は前置詞である。

#### 【4】

A.

全訳

我々は一生のうちに一連の戦争と革命を見てきた。我々の大部分はこれらの出来事のいくつかを自分の国で経験してきたが、そうでない人々ですら戦争や革命によって自分たちの生活を変えられたのである。

B.

全訳

①最近の概算によれば、50億の人間がこの小さな惑星の表面にひしめいている。それほど遠くない昔の石器時代には、我々は地球上に弱々しい足場を築いているにすぎなかった。その後我々は数を増やしながらかがっていき、とうとう今日では至るところに住みついている。②我々が周囲の環境にもたらした変化のため、急速にこの惑星は人間の居住には適さなくなってきた。我々は自分自身の知恵による犠牲者なのだ。③その知恵によって、現在すでに大規模な人口は40年経たないうちに2倍の100億にふくれあがるだろう。我々は決して珍しい種ではないのに、絶滅の危機に瀕しているのである。

#### 【5】

解答

- (1) 「全訳」の下線部①～⑦参照。
- (2) c
- (3) 均衡のとれた人生観を持っている人。(17字)

解説

(1)

- ①◇ it は to do を受ける形式主語。
  - ◇ a vision of ～ 「～に関する見通し」 of の目的語は what you ～ ten years' time.
  - ◇ in front of ～ 「～の面前に」 は have を修飾している。
  - ◇ what ～ = things which ～ 「～するところのもの」
  - ◇ be doing : 将来の一時点で進行している内容を表す。
  - ◇ in ten years' time 「10年後に」 (= in ten years)
    - in : 経過時間を表す 「…後に」
- ②◇ If you do not get the required study you need for your future work accomplished during these years 「この時期に将来の仕事に必要な必修の勉強を終えておかないと」
  - get [have] O done 「①Oを…してもらう ②Oを…される ③Oを…してしまう (完了)」
  - 下線部がO
  - accomplish 「～を成し遂げる」
  - the required study (that) you need ～ と関係詞を補って考える。
  - required 「必修の」 (= the study which is required)
  - more than likely 「ほぼ確実に」

- will not … に挿入された形
- get it done
- it は the required study you need for your future work を指す。
- not … at all 「全く…ない」
- ③◇ absorb 「～を吸収する」
  - ◇ as ~ as … 「…と同じくらい～」
  - ◇ efficiently 「能率的に」
  - ◇ it does = the brain absorbs information
- ④◇ without ~ 「～なしで〔に〕」
  - ◇ to shoot for ~ 「～を目指す」
  - some goal or other を修飾する形容詞用法の不定詞。修飾される語が不定詞句の中の前置詞の目的語になっている。
  - some ~ or other 「何らかの～」
- ⑤◇ without the foggiest idea what a lawyer does all day 「弁護士が一日中何をするのか少しも知らずに」
  - foggiest < foggy 「ぼんやりとした」
  - ~ idea (of) what a lawyer does all day と前置詞が省略されていることに注意。  
cf. I have no idea. (わかりません。)
  - ◇ the many aspects of law in which he or she might end up involved 「彼あるいは彼女が最後には関係することになるかもしれない法曹界の多くの側面」
  - 前置詞 + 関係代名詞  
< he or she might end up involved *in* law
  - aspect 「側面」
  - might : 仮定法からきた用法で現在に関する推量を表す。may よりも婉曲な表現。
  - end up (as) C 「最後にCとなって終わる」
  - involved in ~ 「～に巻き込まれて；～に関係して」
- ⑥◇ it is no use talking to A nor, on the other hand, to B
  - 「Aに話をしても、また一方でBに話をしても無駄である」という文の骨組みを見落とさないよう注意する。
  - it is no use … ing 「…しても無駄である」
  - 否定語 A nor B 「AでもBでもない」
  - on the other hand 「その一方で」が挿入された形
  - ◇ a person so caught up in his chosen field that ~ 「自分が選んだ分野に夢中になるあまりに～する人」
  - so ~ that … 「非常に～なので…」
  - be caught up in ~ 「～に夢中になる」  
= a person who is so caught up in ~
  - chosen 「好きな；選ばれた」  
< choose *v.*

○ consider O (to be) C 「OがCであるとみなす」

⑦◇ recommend 「～を推薦する」

◇ a course of study for you to pursue 「あなたが続けるべき科目」

○ to pursue は a course of study を修飾する形容詞用法の不定詞。

○ 修飾される語が不定詞の意味上の目的語になる関係 (= a course of study which you should pursue)

○ for you が不定詞の意味上の主語

◇ more importantly 「もっと重要なことには」

◇ what to expect = what you should expect 「あなたが期待すべきこと」

○ tell の直接目的語になる「疑問詞 + to do」

◇ get to the finishing 「仕上げの段階に達する」

◇ practice law 「弁護士業を開業する」

○ practice 「～を開業する；～に従事する」

◇ yourself : you を強調する再帰代名詞の用法。

(2)

④職業のために勉強する大切な時間はほとんど残っていない状態で

○ with O C 「OがCの状態」《付帯状況を表す用法》

○ little 「ほとんど…ない」

○ leave over ~ 「～を残す」

a あなたが職業のために勉強するのを時間は待ってくれるであろうが

b 一生懸命試みれば、あなたは職業のための勉強時間を見つけるであろうが

c あなたは仕事のための勉強時間をあまり見つけられないであろうが

d すべてのささやかな時間を最大限に活用する方法を知っていれば、あなたは職業のための勉強をすることができるであろうが

(3)

ℓ. 18 It makes far more sense to first talk to someone in the profession with a balanced outlook on life の部分から判断する。

全訳

18歳という君の年齢では、①10年後にどんな仕事をしていきたいかという見通しを目の前に描くことが絶対に必要である。20歳から30歳までの時期は、物事を学ぶあらゆる時期の中で最も重要な時期である。②この時期に将来の仕事に必要な必修の勉強を終えておかないと、君はほぼ確実にその勉強を成し遂げることはないだろう。30歳までに君の生活は、妻子、家庭、仕事のある生活となり、一生の職業のために勉強する大切な時間はほとんど残っていないだろう。③この年齢の時には人の頭脳は若い時ほど能率良く情報を吸収しないとさえ言う人もいる。

30歳に向けての君の人生の目的や目標は今では夢や幻想にすぎないと言えるかもしれないが、それにもかかわらず現時点での刺激や勉学の励みとしてなお君の心の中心に置いておかねばならない。④目指す何らかの目標がなければ、長時間の勉学を続けることはほとんど不可能である。新たな1日が来て、君が足を床に下ろすたびに、目標を自分の眼前にかか

おかねばならない。なぜならばこうすることによってこそ、君は全ての苦勞を切り抜けることができるからである。すなわち、難しい勉強、落第した試験、論文の悪い点数、退屈な教授、あるいは難しいけれども必修の科目等を切り抜けることができるのである。

いったん目標を決めたら、その目標についてできるだけ多くの情報をねばり強く探し続けなさい。⑤弁護士は一日中何をするのか少しも知らずに、つまり結局自分が関係することになるかもしれない法曹界の多くの側面について何も知らずに、「私は弁護士になろうと思う」と言う人が多い。その職業について、均衡のとれた人生観を持っている人とまず話すほうがはるかに賢明である。⑥自分が選んだ分野に夢中になるあまりに法律をこの世で唯一の話題としか考えない人や、他方自ら選んだその仕事が嫌いだという人と話しても無駄だ。⑦良い「助言者」なら君が続けるべき科目を推薦してくれるであろうし、さらに重要なことに、君が仕上げの段階に達して開業するという時には、何を予期すべきかということを教えてくれるだろう。

**注**

- ℓ. 5 ◇ your life becomes one of wife and children, a house, a job 「あなたの生活は妻子と家と仕事のある生活になる」
- one は life を指す
  - 構成要素・材料を表す of 「～から成る」
- ℓ. 8 ◇ Your aim or goal in life for the age of thirty might be termed only a dream or a fantasy right now 「30歳に向けての君の人生の目的や目標は、今は夢や幻想にすぎないと言えるかもしれない」
- aim 「目標」
  - might : 婉曲表現。may よりも控えめな表現。
  - term O C 「OをCと呼ぶ〔名付ける〕」
- ℓ. 9 ◇ forefront 「最前線；中心」
- ◇ as your stimulus or motivation at this point 「現時点での刺激や勉強の励みとして」
  - as : 前置詞 「…として」
  - stimulus 「刺激」
  - motivation 「動機を与えること；刺激」
- ℓ. 10 ◇ it is almost impossible to keep up long hours of study 「長時間の勉強を続けることはほとんど不可能である」
- it は to do を受ける形式主語。
  - keep up ~ 「～を持続する；続ける」
- ℓ. 11 ◇ each new day (when) you put your feet on the floor と補って考える。
- ℓ. 12 ◇ for : 理由を表す節を導く接続詞 「というのは…だから」
- ◇ get A through B 「AにBを通り抜けさせる〔切り抜けさせる〕」
  - ◇ rough spots 「でこぼこの所；辛い場所」
- ℓ. 13 ◇ the hard work, a failed exam, a poor mark on an essay, a boring professor, or a difficult but required course
- 直前の all the rough spots の内容を同格的に説明している部分。

- a *failed* exam 「落第した試験」
- 自動詞の過去分詞は完了の意味を表す
- a boring professor 「退屈な教授」  
cf. a bored professor (退屈した教授)
- boring 「人を退屈させるような」
- a difficult but required course 「難しいが必修の科目」
- required : course を修飾する過去分詞。  
= a course that is *required*
- ℓ. 15 ◇ once ~ 「いったん~すると」
  - ここでは接続詞用法  
cf. 副詞用法の場合「一度；かつて」の意
  - ◇ determine 「~を決定する」
  - ◇ pursue finding out as much about it as you possibly can 「それについてできるだけ多くの情報を発見し続けなさい」《命令形》
  - pursue 「①~の後を追う ②~に付きまとう ③ (研究・調査・仕事など) を続ける；~に従事する」
  - as ~ as S can 「できるだけ~」
  - possibly : can と共に用い、意味を強める用法「何とかして；できる限り」
  - it は your goal を指す。
- ℓ. 18 ◇ *It makes far more sense to first talk to someone in the profession with a balanced outlook on life* 「その職業についている、均衡のとれた人生観を持っている人とまず話すほうがはるかに賢明である」
  - It は to 不定詞を受ける形式主語。
  - make sense 「意味をなす；道理にかなう；賢明である」
  - far : 比較級を強める用法「ずっと」
  - first : to 不定詞に挿入された形。
  - outlook 「①見晴らし；眺め ②見通し；前途；展望 ③見解」

## 【6】

### ポイント

いわゆる‘There is 構文’は非常に有名であるが、使われる動詞は単純な be 動詞ばかりとは限らない。また、英語では無生物を主語にした構文がよく用いられる。ここでは5文型との関連でこれらを演習する。

### 解答・解説

(1) There is always somebody there. [MVS]

いわゆる‘There is 構文’などと呼ばれる形式。主語は somebody で動詞が is である。

(2) There happened to be a train accident this morning. [MVS]

‘There is 構文’の is は様々な修飾を受けることがあり入試では頻出。この問題では、is が happened to be になったと考えればよい。

- (3) There occurred a mysterious case last night. [MVS]  
 'There is 構文'の is が occurred に置き換わった形とも考えられる。  
 occurred は「発生する」という意味の自動詞であり be 動詞の代わりとして用いられている。
- (4) This road will lead you to the station. [SVO]  
 無生物主語構文とも呼ばれる形である。「この道が、あなたを駅へと導く。」と考える。
- (5) The next morning found him still unwell. [SVOC]  
 無生物主語構文にして find O C を利用する。「翌朝が、彼が依然不快だとわかった。」という形式で日本語としては馴染みがない表現であるので、覚えておくべき事項と言える。
- (6) A little carelessness cost her a broken leg. [SVOO]  
 これも無生物主語構文にして cost O<sub>1</sub> O<sub>2</sub> 「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>という犠牲をかける」の形式にする。

## 【7】

A.

### ポイント

5 文型の SVOC の要素を的確につかむ訓練を、誤文訂正という形で行う。

### 解答・解説

- (1) it を取る。  
 SVC の文となり、trying to talk over the telephone in a foreign language が主語 (S) で seems が動詞 (V)、very difficult が補語 (C) である。
- (2) business を取る。  
 stay (V) open (C) 「開店中である」となるので business は不要。
- (3) me → to me  
 explain は第 4 文型を取らない動詞の代表格。say と同様に explain A to B 「A を B に説明する」という形になる。他には suggest A to B 「A を B に提案する」が重要なので覚えておくとよい。
- (4) leave → to leave  
 ask A to do 「A に…するように求める」この形は「命令文の間接話法」としても有名。  
 Ex. He said to me, "Do it." = He told me to do it.  
 He said to me, "Please do it." = He asked me to do it.

B.

### ポイント

「どうして～」の表現をマスターしよう。

### 解答・解説

- (a) What made him (get) angry?  
 直訳は「何が彼を怒らせたのか？」
- (b) What did he get angry for?  
 直訳は「何のために彼は怒ったのか？」What … for? で「何のために→どうして」となる。
- (c) How come he got angry?  
 How comes it that S V? という形が How come S V? となったと言われ、「どうして S が





Ex. The French Revolution ushered in a new age.

(フランス革命は新しい時代の到来を告げた。)

the song of birds that ushers in the dawn (夜明けを告げる鳥の歌声)

(4)

「落ち着きなさい」と相手をなだめる時の表現としては、

(Just) Stay calm.

(Just) Calm down.

Calm yourself.

Don't get so excited.

Cool down.

Pull yourself together.

Don't be nervous.

Take it easy.

Relax.

などいろいろあるが、中でも calm[ká:m] は、口語表現のみならず、発音問題、読解問題でも出題されるので要注意。

calm *v.* = become calm

Ex. "Excuse me. I'm lost." "Calm down. Where are you going?"

(すみません。迷子になってしまったんです。)

(落ち着いて下さい。どこに行かれるんですか。)

calm *adj.* = ① not nervous, angry or excited ② peaceful and undisturbed

Ex. ① He remained calm in the crisis. (彼はその危機に際して落ち着いていた。)

② a calm day (穏やかな日)

(5) 「あなたとお話できて楽しかったです。」は条件を考えなければ

It was nice talking to you.

とするのは容易だが、条件は4語である。

口語体の決まり文句では、文頭の It's や It was はよく省略される。本問においても It was を省略して、Nice talking to you. とすればよい。

(6) 「連絡を取り合いましょう。」を4語で表せば

Let's		keep		in		touch.
		stay				contact.
			communication.			

touch と contact は 電話・手紙など種々の通信手段による連絡のやりとり、communication は直接会ったり、電話・手紙で情報交換しあうことを表す。「連絡；交渉」の意味で用いる touch は受験生の盲点である。次の用例で確認しておこう。

Ex. Have you been in touch with Fred recently?

(フレッドと最近手紙のやりとりをしていますか。)

The old lady kept in touch with New York Society.

(その老婦人はニューヨーク社交界と接触を保っていた。)

I've lost touch with my brother since.

(以後、兄とは音信不通です。)

The leaders were out of touch with the people.

(指導者達は国民と没交渉になっていた。)

#### 今日の一言

After a storm comes a calm.

「嵐の後には静けさが訪れる。」

After a storm という前置詞句が前置されて、MVS という構造になっている。

「どんなにひどい嵐であっても必ず過ぎ去って穏やかな晴れ間がやってくる」と述べるこのことわざは高校2年生である君たちにも十分に示唆深いものであろう。ただ日本語訳で「雨降って地固まる」というように解釈する人もいるようだ。

### 3章 名詞節

#### 問題

#### 【1】

#### ポイント

2語以上がまとまって1つの名詞や形容詞や副詞のように働くものを「句」と言う。さらにS Vを含んだまとまりが1つの名詞や形容詞や副詞のように働くものを「節」と言う。ここでは句と節の働きを確認していこう。

#### 解答・解説

A.

(1) of their departure が time という名詞を修飾する形容詞句を作る。the time of their departure が全体として1つの名詞となる名詞句を作る。

「彼らの出発時間がわかりません。」

(2) without a mobile phone が live という動詞を修飾する副詞句を作る。a mobile phone が名詞句を作る。

「私たちは携帯電話なしでは生きられません。」

(3) standing at the gate が boy という名詞を修飾する形容詞句を作る。at the gate は standing を修飾する副詞句となる。または、the boy standing at the gate が名詞句を作る。

「門のところに立っている少年を知っていますか。」

(4) explaining it again が主語（形式主語〔仮主語〕itを受ける実質主語〔真主語〕）になる名詞句を作る。

「繰り返し説明するのは無駄だ。」

○ It is no use … ing 「…しても無駄である」

B.

(1) that wrote this book が lady を修飾する形容詞節を作る。

that は関係代名詞 who の意味。「この本を書いた女性は大変有名な女優です。」

(2) when my father will come back again が直接目的語となる名詞節を作る。

when は疑問副詞。「父が次にいつ戻ってくるかはわかりません。」

(3) when you come next time が give を修飾する副詞節を作る。

when は接続詞。「今度来た時にこの本をあなたにあげましょう。」

(4) when I saw her the first time が moment を修飾する形容詞節を作る。

when は関係副詞。「私は彼女と初めて会った瞬間を未だに覚えています。」

## 【2】

### ポイント

主語になる名詞節のパターンを確認していこう。

### 解答・解説

(1) That

「彼がそう言ったというのは本当だ。」

That he said so が名詞節で is の主語となる。

(2) Whether

「あなたが上手くいくかどうかは自身の努力による。」

Whether … or not が depends の主語となる名詞節を作る。

(3) How

「あなたが何歳かということは何歳に感じているかということほど大切ではない。」

How old you are と how old you feel が共に名詞節を作っている。

(4) What

「彼が言ったことが彼女を怒らせた。」

What he said が made の主語となる名詞節を作る。

(5) Why

「イーサンがその時どうして笑ったのかは明白です。」

Why Ethan laughed then が is の主語となる名詞節を作る。

## 【3】

### ポイント

整序英作文を通じて、目的語となる名詞節を見ていこう。名詞節なので「～ということ」と訳するのが基本である。副詞節との違いについても気をつけておこう。

### 解答・解説

(1) I'll see to it that it never happens again.

○ see to A 「Aに注意する；気をつける」のAを形式主語itと実質主語that節に直した形が, see to it that S V 「SがVであるよう注意する；確認しておく」である。

(2) I want to know what dieting girls actually eat.

○ what S eat が名詞節となり「Sが何を食べるかということ」という意味になる。‘間接疑問’とも言われるが、これは‘疑問詞が導く名詞節’のこと。

(3) The researcher asked the students what posture they liked when sleeping.

○ ‘what + 名詞 + S + V’が「Sがどんな名詞をVするかということ」等の意味になる名詞節を作る。このwhatは疑問形容詞「どんな～」であり(2)と同じく間接疑問と呼んでもよい。

○ posture 「姿勢」

(4) I think it a great pity that traditional arts are disappearing.

○ itが形式目的語であり、that節が実質目的語となる名詞節である。[SVOCO]

○ O = it, C = a great pity であるので、O is C と考えると、"It is a great pity that S V."

「SがVなのは極めて残念です」という文が内在していると考えてもよい。

(5) You are responsible not only for what you say but also for what you do not say.

○ what you say と what you do not say がいずれも名詞節である。

○ not only A but also B 「A だけでなく B もまた」

be responsible for A 「A に対して責任を負う；A の原因となる」

(6) I was always surprised at how quickly my father could fix a clock.

○ how quickly 以下が名詞節となり，前置詞 at の目的語の働きをしている。

○ how quickly my father could fix a clock で「父がなんて素早く時計を修理できたかということ」が直訳。

(7) It seems to be taken for granted that Japanese people take everything at face value.

○ take it for granted that S V 「S V を当然と思う」it は形式目的語で that 節が実質目的語の形。これを受動態にすると，It is taken for granted that S V となる。

○ at face value 「額面通りに」

#### 【4】

A.

全訳

地球は平らであるに違いないということは，以前には非常に明白で自明なことに思われていたので，それ以外の可能性があることを示唆しただけでも冗談とみなされてしまっただろう。

B.

全訳

人間が生まれもっているものとは，高度に普遍的な学習能力，つまり教育可能という特性である。確かに教育可能であるということは，人間に見られる種の特性である。だが遺伝的な限界を考慮に入れると，人間が何を学ぶかは，生まれた環境の人為的な部分と，それがどのように人間に働きかけて，その文化に普及しているやり方に応じて人間を作り上げるかに完全にかかっている。人間とは，要するに，あつらえ品のようなものである。

C.

全訳

興味深いことだが，我々が知識を得る際に言語が大変重要な役割を果たすというまさにその事実が，我々の多くが抱く，間違った考えの根底にあるかもしれない。その間違った考えとはつまり，言語の唯一の機能は情報を伝えることであり，我々が読んだり聞いたりするすべては，単に我々により多くの事実を与えて我々の知識の蓄えを増やすことを目的としているという考えである。情報を伝える機能は言語の持ついくつかの機能のほんの1つにすぎないのであり，情報を与えるということは人々が話したり書いたりする目的のほんの1つにすぎないということが，事の真相である。

言語が持つ他の目的は，感情を表現すること，他人の感情に影響を与えること，また他人の行動に影響を与えることである。そして我々が忘れてはいけないのは，言語は同時にいくつかの働きをするということである。

【5】

解答

- (1) (言葉による意思伝達のみならず) 言葉を用いない意思伝達。  
 (2) ② b ③ c ⑤ c  
 (3) not what he said but the way he said it  
 (4) 通行人を見過ぎると詮索好きだということになる, ということ。  
 (5) (机を叩くなどして) 指先で感情を表してしまう, ということ。  
 (6) 「全訳」の下線部④～⑧参照。

解答

- (1) we are doing it = we are communicating with one another nonverbally(, as well as with words)  
 (2) ② assume 「～だと思い込む」  
 a pretend 「～のふりをする」  
 b suppose 「～だと思う」  
 c notice 「～だとわかる；気付く」  
 ③ incidental 「偶然の」  
 a convincing 「もっともらしい；人を納得させるような」  
 b possible 「可能な」  
 c casual 「偶然の；思いつきの」  
 ⑤ potent 「力強い；影響力のある」  
 a virtual 「実質上の；仮の」  
 b essential 「不可欠な」  
 c powerful 「力強い；有力な」  
 (3) ◇ not A but B 「AではなくB」  
 ◇ what S V = things that S V 「～するところのもの」  
 ◇ the way S V = how S V 「～の仕方」  
 (4) ◇ look too much, and you are inquisitive と補って考える。  
 ◇ 命令法またはそれに相当する句の後で条件を表す and 「そうすれば」  
 (5) ◇ 前の内容をふまえて何を意味するのかを読み取る。  
 ◇ chatter 「べちゃくちゃ喋る」  
 (6)  
 a ◇ researchers have discovered that … 「研究者たちは…ということを発見してきた」  
 ○ in recent years 「近年」が挿入された形  
 ◇ there is a system to them almost as consistent and comprehensible as language 「それらには、言語とほぼ同じくらい、一貫した包括的な体系がある」  
 ○ them は these actions を指す。  
 ○ as ~ as … 「…と同じくらい～」  
 ○ consistent 「一貫した」  
 ○ comprehensible 「理解できる；包括的な」

- ⑥◇ what the nonverbal elements express very often, and very efficiently 「言語を用いない要素が非常に頻繁に、しかも非常に効果的に表現すること」
- 文の主語になる部分
  - efficiently 「効率よく；効果的に」
- ⑦◇ be careful about ～ 「～に注意深い；気を使う」
- ◇ how and when 「どうやってそしていつ…するか」
- ⑧◇ Americans (who are) abroad 「外国にいるアメリカ人」
- ◇ find local eye behavior hard to interpret 「その国の人々の目の動きが理解しにくいと思う」
  - find O C 「O が C だと思う；わかる」
  - local 「その土地の；現地の」
  - hard to do 「…するのが難しい」
  - interpret 「～を解釈する；通訳する」
- ⑨◇ be supposed to do 「①…だと思われている ②…することになっている, (二人称主語で) …しなければならない」
- ◇ just enough to show that you are aware of his presence 「彼の存在に気付いているということをちょうど示すくらい十分に」
  - enough to do 「…するくらい十分に」
  - that 以下は show の目的語になる名詞節。
  - be aware of ～ 「～に気付いている」
  - his presence 「彼 (= 通行人) の存在」
- ⑩◇ say nothing to ～ 「～に何も伝えない, ～を感動させない」
- ◇ who は Americans に補足説明を加える非制限用法の関係代名詞。
  - ◇ expect O to do 「O が…することを期待する〔予期する〕」
  - to nod, to murmur の両方に続く
  - ◇ nod 「うなづく」
  - ◇ murmur 「ささやく」
  - ◇ A , such as B 「B のような A」
  - ◇ mm-hmm : アメリカ人のあいづちの擬態音
- ⑪◇ there are times when ～ 「～な時がある」
- when は times を先行詞とする関係副詞
  - ◇ what a person says with his body 「ある人が体で言うこと」
  - when 節内の主語になる名詞節
  - ◇ give the lie to ～ 「～が嘘であることを証明する；～と矛盾する」
  - ◇ what he is saying with his tongue 「その言葉を用いて言っていること」
  - to の目的語になる名詞節。
  - tongue [tʌŋ] 「舌；言語」



我々は皆、言葉を使ってだけでなく、言葉を用いないでもお互いに意思を伝達し合う。たいていの場合は、我々は自分がそうしていることに気付いていない。我々は、眉毛や手で感情を表したり、誰かと目が合って目をそらしたり、椅子に座りなおしたりする。これらの仕種は無作為で、偶然のものであると我々は思い込んでいる。③しかしこのような仕種には、言語とほぼ同じくらい一貫して包括的な体系があるということを、近年研究者達は発見した。④言葉以外の要素により、非常に頻繁に、しかも効果的に表されるのは、伝達する内容の感情的な面である。人が好かれているとか、嫌われているなどを感じる時、しばしばそれは「相手が何を言ったかではなく、どのように言ったか」ということによる場合が多い。

身振りの中でも最も影響力のある要素の1つは、目の動きである。⑤アメリカ人は、いつどのように互いに目を合わせるかに気を使う。⑥アメリカ人が外国で、その国の人々の視線の動きを解釈しがたいと思うことが時折ある。ある人が次のように回想した。「テル・アビブでは落ち着かなかつた。通りで出会う人々は、私をまともに見つめた。しかも上から下までじろじろと見たのだ。髪が乱れているのか、チャックが開いているのかと心配し続けたが、結局、ある友達がイスラエル人たちは通りで他人をじっと見ることを何とも思っていないんだと説明してくれた。」

アメリカの路上で適切に振舞うには、注目する時としない時との微妙なバランスを保つことが必要である。⑦すれ違う人に対しては、その存在にも気付いていることをちょうど示す程度だけ視線を向けなければならない。もしあまりにも少ししか見ないなら、高慢であるか隠し事をしているかのように見えるし、他方、見過ぎたりすると、詮索好きということになる。極東では、会話をしている間少しでも他人を見つめることは、不作法とされる地域がいくつもある。イギリスでは、話し手をじっと見つめ、興味を持っている印として、時々瞬きするのが礼儀正しい聴き手である。⑧そのような瞬きによってアメリカ人には何も伝わらない。アメリカ人は聴き手が頷いたり、「うん、うん」のように何かつぶやくことを期待しているのである。

⑨人が体によって言っていることが、言葉で言っていることと矛盾する場合もある。シグマンド・フロイトは、かつて次のように書いた。「どんな人間も秘密を守ることはできない。彼の口は黙っていても、指先でべちゃくちゃ喋るのだ。つまり、本心が体中から滲み出るのである。」このように、人は表情をうまくコントロールし、冷静で自制しているようにうまく見せることはできるかもしれないが、緊張と不安の印がもれているということ、つまり、足にそれ自身の命があるかのように、絶え間なくそわそわと足踏みをしているということには気付かないのである。怒りも、足の動きでわかってしまうであろう感情の1つである。議論の間、足はしばしば硬直する。

人間同士の意思伝達が全て、言葉だけで行われるなら、それは非常に退屈なものになるであろう。しかし実際には、意思伝達の中で言葉は小さな役割しか果たしていないのである。

## 注

- ℓ. 1 ◇ one another 「互いに (= each other)」  
 ◇ nonverbally 「言葉を使わずに」  
 ◇ A, as well as B 「B同様にAも；BだけでなくAも」

- as well as (all of us communicate with one another) with words と内容を補って考える
- = not only B but also A
- ℓ. 2 ◇ be aware that 「～ということに気づいている」
  - ◇ gesture 「身振りをする」
- ℓ. 3 ◇ shift 「～を変える」
- ℓ. 4 ◇ random 「でたらめの；無作為の」
- ℓ. 11 ◇ disturbing 「人を不安にさせるような」
  - cf. disturbed 「悩まされた；神経症の」
- ℓ. 12 ◇ recall 「思い出す」
  - ◇ stare 「見つめる」
  - ◇ right：強調を表す副詞「まっすぐに；まともに」
  - ◇ look O up and down 「O をじろじろ見る」
  - ◇ keep …ing 「…し続ける」
- ℓ. 13 ◇ wonder if [whether] 「～かなと思う；～かどうか知りたいと思う」
  - ◇ be uncombed or unzipped 「髪が乱れているのか、あるいはチャックが開いているのか」
  - ◇ think nothing of ～ 「～を何とも思わない [= think little of]」
    - cf. think much of ～ 「～を重んじる；高く評価する」
  - 主節が explained と過去形なのに think と現在形になっているのは、「心理、現在に及ぶ習慣」を表すので時制の一致を受けないため。
- ℓ. 15 ◇ a nice balance of ～ 「～の微妙なバランス」
- ℓ. 17 ◇ appear (to be) C 「C のように見える；思われる」
  - ◇ haughty 「傲慢な；高慢な」
  - ◇ secretive 「隠し立てをする」
- ℓ. 18 ◇ the Far East 「極東」
  - ◇ it is impolite to do 「…することは無礼である」
  - it は to do を受ける形式主語
  - ◇ at all 「① (否定文で) 全然 ② (条件文で) かりそめにも ③ (疑問文で) そもそも、いったい ④ (肯定文で) とにかく」
- ℓ. 19 ◇ attentively 「注意深く」
- ℓ. 20 ◇ blink 「まばたきをする」
  - ◇ occasionally 「時折」
    - = on occasion(s), once in a while
  - ◇ as 「～として」
- ℓ. 23 ◇ Sigmund Freud 「シグマンド・フロイト (オーストリアの精神分析学者)」
  - ◇ once *adv.* 「一度；かつて」
    - cf. 接続詞用法の場合「いったん…すると」の意味を表す
  - ◇ mortal 「人間」

cf. *adj.* 「死を免れない；命取りとなる」

- ℓ. 24 ◇ betrayal oozes out of him at every pore 「密告が全ての毛穴から滲み出ているのである《直訳》」
- betrayal 「裏切り；内通；密告」
  - ooze 「(副詞(句)を伴って) 滲み出る；滲み出す」
  - pore 「毛穴；気孔」
- ℓ. 25 ◇ thus 「このように；こんなふうに」
- ◇ unaware that signs of tension and anxiety are leaking out, that his foot is beating the floor constantly, restlessly, as if it had a life of its own 「緊張と不安の印がもれているということ、つまり、まるで自分の足にそれ自身の命があるかのように、絶え間なくそわそわと足踏みをしているということに気づかずに」
  - unaware 以下が付帯状況を表している。
  - 後の that 節は初めの that 節を言い換えて説明している部分。
  - leak out 「漏れる」
  - restlessly 「そわそわして；落ち着かずに」
  - as if ~ 「まるで~でもあるかのように」
  - ここでは事実と反する内容が続いているので仮定法過去になっている
- ℓ. 27 ◇ feet and legs : foot 「足首から先」, leg 「足首から上の部分」
- ℓ. 28 ◇ tense 「緊張した；張り詰めた」 cf. tension
- ℓ. 29 ◇ Communication between human beings *would* be just that dull *if it were* all done with words 《仮定法過去》
- that dull = so dull
- ℓ. 30 ◇ actually 「実際に；本当は」

## 【6】

### ポイント

ここでは、補語となる名詞節（特に The fact is that 節の形式）を確認していく。この形式を見た〔聞いた〕瞬間に和訳がイメージできるように訓練しておこう。

### 解答・解説

- (1) 困ったことに

The trouble is that S V.

- (2) 大切なのは〔重要なのは〕

The point is that S V.

- (3) その結果

The result is that S V.

- (4) 現実を言うと〔実際には〕

The reality is that S V.

- (5) 最悪なことに

The worst thing is that S V.

【7】

A.

**ポイント**

同格の名詞節（同格節）について学習していく。「～という」と訳せるのが同格の目印であるが、すべての名詞が同格節を伴えるわけではないことには注意しておこう。

**解答・解説**

(1) (thought の後の) was

「彼は嘘をついているという思いが頭をよぎった。」

○ The thought と that 節が同格関係になっているが同格節が長いいため後置されている。

the thought that he was telling a lie 「彼が嘘をついているという考え」

○ S occurs to A. 「AがSを思いつく」

cf. It occurs to A that S V. (AがSVを思いつく)

(2) which

「精神と物質は区別できないという概念は人類誕生から存在する。」

○ that 節は同格節であり, the notion that S V で「SがVだという概念」という意味になる。よって which は不要。

(3) in

「考えただけでぞっとする人々はほとんど常に間違えているという意見に私はなりがちだ。」

○ the opinion that S V で「SがVであるという意見」となる。in that S V 「SがVという点で」と捉えると the opinion の意味が不明確となる。

(4) is

「大丈夫、悪いことはもう起こりませんよ。」

○ depend upon it that S V で「SVということに頼る」となる。‘depend on 名詞’の形は頻出であるが、節〔SV〕を伴うときには形式目的語 it を置く必要がある。なお、この that 節は it と同格になる名詞節と捉えてもよいが、実質目的語を表す名詞節と捉えてもよい。

B.

**解答**

大切な点は、天然資源が枯渇するかどうかではなく、いつ枯渇するかである。

**解説**

○ not A but B の形を見抜けばよい。

○ not whether natural resources will be exhausted but when natural resources will be exhausted と考える。下線はいずれも名詞節であることに注意。

【8】

解答

- (1) Yoshikawa is far [way] ahead of the other students in English.
- (2) You will fall behind in your studies if you are absent from school so often.
- (3) Thank you for reminding me.
- (4) The sky looks a little threatening.
- (5) The hat looks very nice on you.
- (6) You have good taste.

解説

(1)

「～より前方にいる」「～より進んでいる」という状態を表すには、be ahead of を用いると応用がきく。

be ahead of は

<空間的>

He was ten feet ahead of me. (彼は私の10フィート前方にいた。)

<時間的>

It was ten minutes ahead of his arrival. (彼の到着前10分のことだった。)

※この ten minutes は「10分の分<sup>ぶん</sup>だけ」の意の副詞相当語句。

このように、be ahead of ～ は空間的・時間的な意味に用いられるほか、本問のように抽象的な意味においても用いられる。

→ Yoshikawa is far [way] ahead of the other students in English.

far, way と副詞。本問は他の解答も可能。

- When it comes to English, no other student can beat Yoshikawa.
- No other student can beat Yoshikawa in English.

(2)

「人に遅れる」という動作は fall [drop ; get ; lag] behind, 「遅れている」という状態は be behind で表す。behind は前置詞にも副詞にも機能するので、behind others の様に競争相手を示す語を置いて置かなくてもよい。

(3)

うっかり忘れそうになっていたことを、誰かに教えてもらった時に言う「うっかり忘れるところでした。どうもありがとう。」に対応する決まり文句は Thank you for reminding me. である。

この Thank you for …ing は頻出する形だが、動名詞 reminding に意味上の主語の you または your をおくと非文になるので注意。

× Thank you for your helping.

○ Thank you for helping.

○ Thank you for your help.

remind の意味は cause (someone) to remember つまり「思い出させる」であって、「思い出す」の意味の remember, recall, recollect とは違うので要注意。

次の用例を覚えておこう。

Ex. This picture reminds me of my life in London.

(この写真を見ると、ロンドンでの生活を思い出す。)

I just remember something. (ちょっと大事な用を思い出した。)

Memories become transformed and filled with new meanings each time we recall them.

(記憶は我々が思い出すたびに形を変え、新たな意味を持つようになる。)

e.g. recollect one's childhood days (幼年時代を回想する)

(4)

「ひと雨来そうだ」「空模様があやしい」という時の決まり文句には

Ⓐ We are going to have a shower.

Ⓑ It's going to rain.

Ⓒ It looks 

like	rain.
as if it's going to rain.	a shower.

Ⓓ It's threatening to rain.

Ⓔ The sky looks (a little) threatening.

などがあるが、The sky で始めてという条件を満たすのはⒺだけである。

したがって、The sky looks (a little) threatening. が正解。なおⒹ、Ⓔで用いられている threaten の基本的な意味は「～を脅迫する」(= use threats towards)。

cf. As anger and irritation grew, two of the committee members threatened to walk out.

(怒りと苛立ちがつのり、委員会のメンバーのうち2人は退出すると言って脅した。)

そこから「(悪いことが) 起こりそうだ」(= seem like to come out) の語義へと展開した。この threaten の現在分詞形で形容詞化したのが threatening で「(天気などが) 荒れ模様の、あやしい」という意味で用いられ、a threatening sky 「今にも降り出しそうな空模様」を見てもわかるように、sky と共に用いられると、天候の悪化を示す。

(5)

相手が身につけている物をほめて「～が…にとっても似合っている」という時は、

～ looks very nice on … と表現する。したがって、本問は、

The 

hat	looks very nice on you.
cap	

となる。

なお、主語を You として

You look very nice in the 

hat.
cap.

としてもよい。しかし、この場合、前置詞が in に変わる点に注意。

(6)

日本語の「趣味」には、①「道楽」と②「好み；感性」の意味があり、

①に対応する英語は、a hobby; an interest; a relaxation

②に対応する英語は, (a) taste; (an) interest; (a) liking である。

「あなたは趣味がいいですね」の「趣味」は, ②の「好み;感性」であり, ②の中の (a) taste がぴったりである。

したがって, 本問は,

You have good taste.

となる。good がつく場合は, 無冠詞が普通である。

また, You have (a) cultivated taste. としてもよい。この場合は, a をつけてもつけなくてもよい。

### 今日の一言

A man cannot give what he hasn't got.

「ない袖は振れぬ。」

what he hasn't got が名詞節を作る。

「持っていないものを与えることは出来ない」が直訳になる。背伸びしても実力は上がらない。毎回学習した知識をしっかりと手に入れることで、試験においても答案として与えることが出来るようになるはずだ。



**添削課題**

**【1】**

**解答例**

I came to Japan as an exchange student and at present am working〔concentrating〕 on my graduation thesis.

**【2】**

**解答例**

I read (about) this subject in the paper this morning and was about to post a comment on Facebook, when I saw that one of my friends had already commented.

**【3】**

**解答例**

Sophia : Yesterday I got around to getting a pair of toning shoes at Z Mart.

Jacob : What are “toning shoes”?

Sophia : ㉠ They are fitness shoes that are designed to improve your health and body with regular daily wear.

Jacob : Do they really work?

Sophia : ㉢ They are said to cause you to〔make you〕 use additional muscles when you wear them.

Jacob : Umm. But in any case, I think it most important to keep on practicing (walking) every day.





会員番号	
------	--

氏名	
----	--